

令和3年度滋賀短期大学卒業式式辞

卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。

画像でご覧いただいている保護者や家族の皆さまも、さぞお喜びのことと存じます。式典での晴れ姿を直接お見せできなくて申し訳ありませんがお許しください。また本日、このような状況にもかかわらず、式典にご臨席いただいているご来賓の方々にあつく御礼申し上げます。

本学でもこのような形で行う卒業式が三回目になります。皆さんは、高校の卒業式も、短大の入学式も、そして今日の卒業式と、ずっとコロナ禍の下での式典をおくった世代ということになります。皆さんは18歳から20歳にかけて、人生で最も輝いているときに、感染したかもしれないとか、濃厚接触になったために隔離だとか、なんともやりきれない思いをもちながら学生生活を送ったことになります。

それでも滋賀短期大学では制限はありながらも、基本的に対面授業を続けてきました。大都市の大学では、ほとんどキャンパスに入れないうえ、オンラインの授業ばかりで2年間過ごしたという例も聞いています。オンラインの授業が悪いというわけではありませんが、やはり教室で先生と学生が顔をあわせてやり取りをする、とくに本学のように実習や実験を含む教科が多いところでは、オンラインでは十分に伝わらないものがあります。皆さんも先生方も苦勞しながらコロナ禍を乗り切ってここまで来ました。これはよい思い出にしていいのではないのでしょうか。

もちろん今のところコロナ禍が完全に終息したわけではなく、まだしばらくは感染予防をしながら生活していかなければなりません。卒業して新しい生活をスタートさせても注意してください。

さて世界では、コロナ禍だけではなく、いろいろ理不尽なことが起こっています。11年前の日本には東日本大震災という大きな自然災害がありました。しかもこの時は、自然災害だけではなく、原子力発電所の崩壊という事態が起こった

ため、今なお福島県にはもともと住んでいたところに帰れない人たちがいます。自然災害が自然による被害だけに終わらず、人間の作り出したものを通して、一層大きな被害を生んでしまうというのが現代社会です。

そして自然がもたらす災害ではなく、人間社会が引き起こす最も理不尽なできごとが戦争です。第二次世界大戦が終了して以降も、世界各地では局地的な戦争が絶えていません。しかし今のウクライナでの戦争ほど、理不尽さが際立つ戦争はなかったのではないのでしょうか。毎日のニュースを見るだけで、私たちは何もできませんが、世界の出来事は私たちに関係のないところで起こっているのではなく、どうしてこんなことが起こるのかと考えることにより、人として悲しみや苦しみをわかちあえるようになれるのではないのでしょうか。

最近、私にとって一つの感動的なシーンがありました。北京で行われた冬季オリンピックについては、世界で外交ボイコットが広がるなど、問題が多かったことは知られていますが、その中で一つの事件がありました。

スキージャンプの日本代表である高梨沙羅さんは、2月7日に行われた混合ジャンプ競技で、日本勢のトップとして第1回のジャンプを行いました。飛距離が100mを越える素晴らしいジャンプだったのですが、飛んだ後の検査でジャンプスーツが規定より2cm大きいという理由で失格になってしまいました。思いもよらない失格、それを聞いた高梨さんは泣き崩れました。しかし何とか他の選手のがんばりもあって、チームとしては8位で2回目のジャンプに臨むことができました。高梨さんはみずから志願して2回目を飛び、98m50という好成績で、チームも4位まで順位を上げました。

実はこの時高梨さん以外にもジャンプスーツの大ききで失格になった世界の有力選手が5人も出て、試合のあとで大きな問題になりました。中にはこのような検査をする体制を強く批判した選手もいました。一流選手やそのコーチたちが、いい加減なスーツ作成をするはずはなく、試合前に厳格にチェックもしているはずですから、このような判定が理不尽だといわれるのは無理がないと一般に思われても仕方がないでしょう。

しかし高梨さんは、試合の後に発表した「日本チームを応援してくださっているすべての皆さまへ」というインスタグラムの中で、検査に対する不満や批判は一言も述べていません。ただひたすらに自分のせいでメダルを取ることができなくなったチームの人たち、応援してくれた人たちへの謝罪を繰り返しています。高梨さんの言葉を引きます。

「私の失格のせいでみんなの人生を変えてしまったことは変わりようのない事実です。謝ってもメダルは返ってくることはなく、責任が取れるとも思っておりませんが、今後の私の競技に関しては考える必要があります。それほど大変なことをしてしまったこと、深く反省しております。

そして私のせいでメダルが取れなかったにもかかわらず、最後の最後まで支え続けてくれた伊藤有希さん、佐藤幸椰さん、小林陵侷さん、そして日本チームのメンバーの皆さま、スタッフの皆さまには感謝してもしきれません。こんな私を受け入れてくれて本当にありがとうございました。」

そして最後にこんなことを言っています。

「私が言える立場ではないことは重々承知の上で言わせていただければ、どうかスキージャンプという素晴らしい競技が混乱ではなく、選手やチーム同士が純粋に喜び合える場であってほしいと心から願います。」

この問題は高梨さん個人の責任ではないし、ましてやこのことで責任を取って引退する必要など全くないはずですが。しかし高梨さんはひたすらチームのメンバー、そして何より応援してくれた人たちに自分ができることは謝ることではないと考えたのでしょう。そしてチームのメンバーとしてできることは、2回目のジャンプを飛ぶこと、そして見事にそれをやり遂げました。

高梨さんのインスタに対して、チームの一員だった佐藤幸椰さんは「あなたのジャンプが多くの人々の人生を明るく変えたことはあっても、私の人生を変えた事実などどこにも存在しない。」「時間はかかっても顔を上げて周りを見渡してほしい。そこにはあなたが与えた喜びで満たされた沢山の人がいる。」と励ましています。高梨さんは、一時、引退を考えたようですが、高梨さんがこの事件を乗り越える道はジャンプにしかないはずですが。

それを証明するように、高梨さんのドラマはこれで終わっていません。北京オリンピックが終わって3月6日、ノルウェーのオスロで開かれたスキージャンプのワールドカップで、高梨さんは北京で金メダルを取った選手を敗って優勝しました。3位には北京で混合チームの一人だった伊藤有希さんが入っています。

この優勝をうけて高梨さんは「オリンピック後は、またこの場に立つことを想像できなかつたけれど、沢山の方々に支えて頂き、戻ってこれることができました」「私自身ここに立つまでに沢山の人たちのメッセージに励まされ、支えられました」とインスタに書いています。

スポーツというものはたくさんの方を教えてくれます。ある人は高梨さんのドラマを通じて、人は必ず立ち直れることを学んだと言っています。ただし立ち直るためには一人の力だけではなく、仲間の力を必要とするのです。スポーツは個人競技と団体競技があり、個人競技の方は選手一人の力で決まっているように見えますが、個人がその力を十分に発揮するためには、様々な面でその人を支える仲間がいるはずで、高梨さんはそれを教えてくれたのではないのでしょうか。

おりから北京ではパラリンピックが終了しましたが、そのパラリンピックで一番活躍しているのはウクライナの選手団です。ウクライナの選手たちはメダルを取って表彰台に上がると涙を流しながら、自分たちはウクライナという国と国民に勇気を与えるために競技を戦ってきたと述べていました。

スポーツに政治をもちこんではいけないと言われますが、現在のウクライナの戦争は、政治を超えて人としての人道や人権にかかわる問題です。そんな中でスポーツこそが人間としての尊厳を守るために仲間が支えあう場ではないのでしょうか。実際、ロシアのスポーツ選手の中に、戦争反対の声を上げている勇気をもった人がいます。アスリートの声は世界の仲間が届くはずで、大国の前で倒れそうになっても、ウクライナは世界で決して一人ではないのだということをスポーツが教えてくれています。

皆さんにとってこの2年間はどんな時間だったでしょうか。短い間でしたが、滋賀短期大学という場を通じて皆さんがかけがえのない仲間づくりができたとしたら、大変うれしく思います。これからの長い人生のなかで、それは必ず生きてきます。以上、今巣立っていく皆さんへの式辞とします。

令和4年3月15日

滋賀短期大学学長

秋山元秀